

本 会 だ よ り

“中西シンポジウム設立について”

日本化学会研究外務委員会委員長 干鯛 真信
中西シンポジウム組織委員会委員長 大橋 守

今回、日本化学会とアメリカ化学会との共同主催により、コロンビア大学センテニアル教授である中西香爾博士の名を冠した「中西シンポジウム」が設置され、毎年日米で交互に有機化学、生物有機化学などの分野でのシンポジウムを開催すると共に、生物学的現象に対して化学および分光学的方法を応用して顕著な研究業績を挙げ、国際的協力研究を推進した研究者に対して日本化学会とアメリカ化学会の名を刻した「中西メダル」が授与されることになった。

中西香爾博士は、天然物化学、有機化学、生物有機化学の分野において独創的な顕著な業績を挙げ、我が国においては恩賜賞、日本学士院賞(1990年)、日本化学会賞(1978年)を受賞し、米国においても、全米科学アカデミー化学賞(1994年)、アメリカ化学会コープ賞(1990年)、Welch賞(1996年)などを授与されている。名古屋大学助教授、東京教育大学、東北大学、コロンビア大学教授として日米の化学界で活躍し、その門下生は300名を超えている。この間、ナイロビのThe International Center of Insect Physiology and Ecology (ICIPE)のResearch Directorとして、またサントリー生物有機科学研究所長として国際的な視野に立って学術交流に尽力してきたことはよく知られている。

1994年5月中西博士のこのような業績を記念して米国ではコロンビア大学化学教室のThomas Katz, Ronald Breslow, Gilbert Stork教授等が、日本では佐治敬三、杉村隆、額田健吉、故野副鉄雄、早石修、平田義正、森田桂の7氏が発起人となり「中西シンポジウム」設立を目指して募金活動を開始した。次いで日本において組織委員会が結成(委員長 大橋守電気通信大学教授)された。1995年5月にコロンビア大学側の募金委員会よりアメリカ化学会および日本化学会に対して、国際交流を深

めることを目的として、このシンポジウムを両国化学会の共同主催にしてはという提案があり、アメリカ化学会は、同年9月に「ナカニシプライズ」を設けることを理事会で決定し、Chem. & Eng. News (November 13, 1995)に発表された。

日本では当初シンポジウム組織委員会の下でシンポジウムを実施する予定であったが、アメリカ化学会と対等の立場でこなうためには、日本化学会の主催とすることが最適であると判断し、1996年2月、組織委員長が日本化学会会長にシンポジウムおよびプライズをアメリカ化学会との共催にする要望書を提出した。日本化学会では、最近とみに重要性を増している国際交流、とくに日米両国の関係強化を考慮して、シンポジウムを両化学会の共同主催にすること、シンポジウムに日米両化学会の名を刻した「中西メダル」を設けることなどを7月の理事会で承認した。ただし資金の運用やシンポジウムの運営等は本会の承認のもと組織委員会が責任をもってあたることが了承された。日米両化学会にとってこのような2国間で共通のシンポジウムを恒常的に主催するのは初めてであり、国際化への画期的な試みとして注目されることである。このシンポジウムが日米間の交流を益々盛んにし、有機化学、生物有機化学の発展に大きく寄与し、人類社会に貢献することを期待して止まない。

「中西シンポジウム」は偶数年は日本で、奇数年は米国で開催し、「ナカニシプライズ」は開催国で選考し、日本では選考委員会に化学会の理事会から1名が参加することなどが決められている。日米両化学会間の協定書、日本化学会と組織委員長間の協定書の調印の準備が現在進んでいるが、1996年はその初年度に当たり、慶応大学教授山村庄亮実行委員長の下で来る12月7日、科学技術館で、文部省科学研究費補助金重点領域研究“天然超分子化学”の公開討論会に引続き実施されることになった。